

「車一台分の優しさとは」

西尾市立幡豆中学校 三年

大須賀 俊樹

最近「バリアフリー」という言葉をよく目にします。そして、僕たちの多くが「バリアフリー」という言葉を知っているのではないのでしょうか。調べてみると、バリアフリーとは「高齢者や障がい者等が生活していく上で、障壁（バリア）となるものを除去（フリー）すること」とあります。しかし、実際にはどんなことなのか、本当の意味はまだまだ世の中に知られていないような気がします。

僕には祖父がいます。僕が小学生だったある日、祖父の家に遊びに行きました。みんなで一緒に夕食を食べてその帰り際、「また遊びに来いよ」と祖父はいつものように明るく見送ってくれました。そして次の日の朝、祖母から電話がかかってきました。祖父が倒れたとのことでした。病名は脳梗塞でした。祖父は救急車で病院に運ばれて治療を行い、その後、リハビリを始めました。一生懸命リハビリを頑張ったおかげで、不自由ながらも話すことも歩くこともできるまで回復しました。でも、ちよつと前まであんなにパワフルで元気だった祖父が身体障がい者になってしまいました。

そんな祖父と一緒に家族旅行に行ってきました。1泊2日の温泉旅行でした。この旅行で僕は、今までは何とも思わなかったことがとても気になりました。それは祖父の「移動」でした。祖父は歩くことはできませんが、少ししか足を上げることができません。杖をつきながらゆっくり歩きます。僕は行く先々では祖父が転ばないように考えながら一緒に歩きました。

その旅行で行った色々な所には、バリアフリー施設があることに気が付きました。泊まった宿は、階段のそばにスロープがあり、階段を使わずにロビーへ行くことができました。廊下やトイレ、お風呂の脱衣所などに手すりがありました。エレベーターのボタンも押しやすい高さでした。建物の中の床は段差がなく、祖父も困ることなく行き来ができたようです。いろいろなところに配慮がされていてとても助かりました。

そして旅行の帰り道、高速道路のサービスエリアに寄りました。そのサービスエリアではトイレの近くに障がい者用の駐車スペースがありました。でも、障がい者マークの付いていない車が停めてありました。だから少し離れた普通の駐車スペースに停めなければいけませんでした。僕は、たくさんの車

が行きかう通路を、ゆっくりしか歩けない祖父に付き添って冷や冷やしながらか横断しました。「体が不自由な人のために用意されている場所を、どうして使っているの。」と僕が言うと、母は、「普通の駐車場と同じ感覚で、誰でも停めていいと思って使っているのかもしれないね。」と言いました。確かに、障がい者用の駐車スペースは入口の近くにあって、1台分が広くて、空いていることも多く、つい停めなくなってしまうかもしれません。でも、なぜそこに障がい者用の駐車場があるのかということをおちよつと考えて欲しいと思います。障がい者は長い距離を移動するのが大変で、車の乗り降りにも他人の介助が必要なのです。

街の中の施設のバリアフリー化は確かに進んでいます。しかし、体の不自由な人や困っている人がその施設を使いたい時に使えないと意味がないと思います。みんなが思いやりの心を持つことができなければ本物のバリアフリーとは言えないでしょう。だから僕は、日常生活の中でもいつも他人の立場に立って考えられるように心掛けたいと思います。そして、誰にも優しく接することができるように行動していきたいと思えます。